

ベンチャー
仕掛け人



十勝圏振興機構 科学技術コーディネーター 佐山 晃司氏

北海道・十勝地区の産学官が農産物の高付加価値化に向け、連携を加速している。高機能性食品などを開発し、事業化やベンチャーの創出をめざす狙いだ。十勝は国内有数の畑作地帯だが、輸入規制緩和や担い手の不足の深刻化で経営効率の

向上が急務。財団法人十勝圏振興機構(帯広市)科学技術コーディネーターで旗振り役の佐山晃司氏に展望と課題を聞いた。

高機能食品の開発後押し

「十勝地区の産学官の連携の現状は。昨年、文部科学省の『都市エリア産学官連携促進事業』の指定を受け、三年計画で農産物の機能性を重視した技術開発をテーマに研究を開始した。帯広畜産大を核に研究機関、企業が参加している。以前から産学連携の芽はあったが、ようやく本格的な取り組みが始まったという印象だ」

「長イモを使った機能性食品、ジャガイモからの有

用ペプチド生産、そば・豆類の健康機能性スプラウト(新芽)生産のほか、酪農地帯でチーズ工房も多く、ナチュラルチーズの高品質化にも取り組んでいる」

「すでに一部で成果が出ている。ジャガイモから抽出したペプチドという成分に、悪玉コレステロールを減らす効果がある」

「生食時に中性脂肪や総コレステロールを減らす効果がある長イモを使った漬物などを出している。ここからペプチドを抽出できる可能性がある」

「十勝の農業は今まで恵まれてきた。畑作四品(小麦、ヒト、大豆、パレイシヨ)には国から一定の補助金が出る。経営規模も平均三十九畝と国内では大きく、農家収入も高い。だが財政難で補助金は削減される方向にある。少子高齢化で跡継ぎ問題など人手不足も進む。新しい付加価値をつけ、コスト削減に取り組みなければ海外とは対抗できない」

佐山氏は35年(昭10年)札幌市生まれ。58年北海道大農学部卒、日本甜菜製糖入社。取締役総合研究所長を務めた。在任中に産学連携の共同研究に取り組んだほか、帯広畜産大では客員教授の経験もあり、昨年、請われて十勝圏振興機構の科学技術コーディネーターに就任した。

産学の壁打破へ
潤滑油役に徹す

「実働部隊は財団のスタッフ。自分は産学のコミュニケーションを円滑にする役割」と話す。産学連携が叫ばれながら依然、その壁は厚いのが実情だが「連携なくして十勝の農業と食品関連産業の未来は開けない」と強調。その布石を打つ役割に徹している。

(函館支局 川上寿敏)